

14) イチハツ=鳶尾

イチハツはアヤメ科の多年草で、原産地は中国の内陸部からビルマ北部である。高さは30~50cmで、根茎は太く短く叢生する。葉は剣形で先端がとがり、縦脈が隆起してよく目立つ。初夏、30cmほどの花茎をのぼして先端に2~3個つぼみをつけ、花径10cmほどの藤紫色の花を順次開花する。花弁は6弁に見えるが、3枚の花弁と3片の外花被片によるもので、外花被片には濃紫色の斑点と、白い鶏冠状の突起があるので他種と区別できる。和名の由来はアヤメ類の中でも最も早く花を咲かせるために、イチハツ(一初)となったものである。しかし実際にはシャガの方が半月ぐらい早く咲く。別称としてはコヤスグサ、アヤメ、ヒデリソウなどがある。学名は『*Iris ectonum*』で、種小辞は屋根に生ずるという意味で、この植物がヒデリソウといわれるように、よく藁葺の屋根などに生えるためである。村上鬼城も、

わら屋根に 一八咲いて 橋の下

という一句を詠んでいる。昔からこの草を屋根に植えると、大風を防ぐという俗信があり、農家の屋根にはイチハツが植えられていた。これを見たマキシモヴィッチが屋根のイリスという学名を与えたというわけである。

イチハツが中国から日本に伝わったのは、平安時代以前のことと思われ、鑑賞用として庭に植えられるようになった。しかしいつごろに伝来したかを示す資料はなく、初めて文献に登場するのは、室町時代の永禄6年(1563年)記述の『御湯殿上日記』(オユドノウエノニッキ)である。『御湯殿上日記』とは、宮中に仕える女官たちによって書き継がれた、いわば当番日記で、天皇の御所にある『御湯殿』の脇に女官たちの控えの間があり、そこに備えられていた日記で、女官たちが交代で記していた。本来は機密の日記であったが、後日、写本が作られたりしたために、正本や写本などを合わせると、室町時代の文明9年(1477年)から江戸時代の文化9年(1826年)まで約350年分のほとんどが遺されており貴重な資料となっている。これとは別に幕末の1832年に記された『草木図説』には薬用としての記述がある。

漢方では根茎を乾燥させたものを『鳶尾根』(エンビコン)と呼び、粉末を吐瀉剤、下剤、利尿に用いる。また生の根はすりつぶして、腫れものや打ち身などにも用いられた。しかし日本では観賞用として改良されることはなかった。

一方ヨーロッパでは、日本と異なり乾燥した土地が多かったためか、イチハツの近縁種の改良が進み、白い美しい花を咲かせるニオイイリスが1867年に日本にも輸入されている。ニオイイリスは南ヨーロッパから東南アジアを原産とする多年草で、葉や花の形はジャーマンアイリスに酷似する。イチハツもビルマあたりまで自生するところから、ニオイイリスとはこのあたりを境界として棲み分け、ヨーロッパに入るとジャーマンアイリスとして改良され、人々から愛されてきたのだろう。ともに葉幅が広く、そこそこにそのルーツの共通性を物語っているように見える。



イチハツの外花被片には、濃紫の斑点と、付け根付近には白い鶏冠状の突起があり、他種との区別が容易にできる（埼玉県深谷市）。



アヤマには濃紫の斑点も鶏冠状の白い突起もない（神奈川県箱根町湿性花園）。

[目次に戻る](#)